Research Institute for World History
Newsletter
No. 22 February 2014

CONTENTS

■「世界史研究プロジェクト」第 2 回研究会の報告
■「「つなぐ」と「くらべる」？――北海道史と沖縄史から世界史へ」
吉嶺 茂樹 ―― 1 頁
■「勉強嫌いな子のための世界史――偏差値 40 程度の高校で世界史を教える意味」
澤野 理 ―― 4 頁
■ RIWH アフリカ奨学基金（第二期）給付のお知らせ ―― 8 頁

発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/

世界史研究所「ニューズレター」
第 22 号（2014 年 02 月）

「世界史教育プロジェクト」第 2 回研究会の報告

国際共同企画である「世界史教育研究プロジェクト」の第 2 回研究会が、昨年 11 月 23 日に本研究所会議室で開かれた。それぞれ北海道と神奈川県で長年にわたって教鞭をとられるお二人の高校教諭の報告を伺い、その後活発な議論が交わされた。

われわれの目に触れる世界史関連の情報は、相次いで出版される書籍をはじめ、各種メディアを通して、近年著しく増大している。それでも、高等学校の必修科目である「世界史」が、多くの人にとってもっとも近しい世界史であり、場合によっては唯一の世界史でさえあることに変わりはない。ただ、公定の教科書が存在するとはいえ、高校の形態もそこで学ぶ生徒の志向も現在は多岐に渡り、教員の持つ教育的背景や知識も様々である。研究会ではそうした点を踏まえて、以下に掲載する報告要旨にあるように、できるだけ体験的、具体的にお話しいただいた。

本研究プロジェクトでは、世界史教科書の構成・叙述の歴史とその国際比較研究に加え、教員と生徒の対面が生成する教育実践の場に、今後も目を向けていくことにする。

「つなぐ」と「くらべる」？ ――北海道史と沖縄史から世界史へ

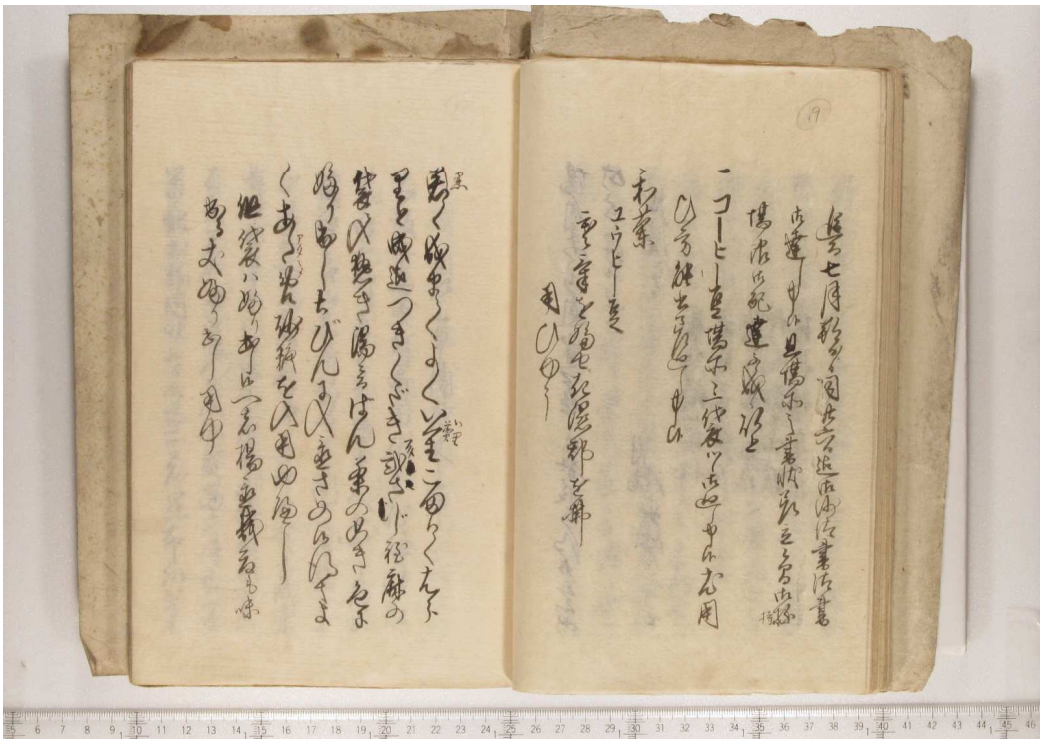
吉嶺 茂樹

本報告は、北海道や沖縄史――一国史の中では周辺部と考えられる地域の歴史――を、あえて世界史の中において考えることの必要性を話してほしいという事務局の依頼に基づき、これまで筆者が取り組んできた、世界史教育の中での一次史料を用いた北方

史と沖縄史の授業を中心に報告を行った。その際、筆者が私学を振り出しに道内の学校で異動を重ねて、ほぼ日本にある全部の形態の高校現場に勤務してきたことを付言した上で、都市部の進学校、都市周辺の教育困難校、郡部の複数学科併置の学校、さらに現在筆者が勤務している通信制の公立高校など、様々な形態の学校においても一次史料を用いた実践に取り組むことが可能であることを指摘した。さらに筆者が 10 年以上続けてきた、大学における地理歴史科教育法や教職課程での外国史の講義において、教員を目指す大学生に中学生や高校生を教える際に、このような地域教材が果たす意味について話してきたことについても報告し、議論を行った。筆者は、中学や高校の教員になろうと思っている大学生と語り合う中で、「歴史を高校生で学ぶこと」と「歴史を中学生や高校生に教える立場になって考えたこと」の間にある問題が、彼らが「受験科目としてどの教科を選択したか」も合わせて「学生の向こうにそれぞれの出身の進学校での歴史教育が見える」と考えたからである。

次に、筆者が現在勤務している北海道有朋高校・通信制について、その教育システムや生徒の実態について触れた。本校は札幌の本校（実施校と呼ぶ）＋全道 32 校の協力校を持ち、多分日本中どこにも無い公立の高校教育システムを持つ学校である。本校は広域制でもない。生徒はあらゆる年齢層（10 代～ 80 代の生徒）と生徒状況をもっている。なお現行の通信制高校では、世界史科は年 4 回を最低回数とする「面接授業」を行い、あとは 12 回のテキスト（レポート）と解説書、教科書、学習書を中心に自学自習をすることが原則となっている。

さて、そもそも筆者が幕末期の北海道史を勉強し始めたのは、初任の紋別市でのある史料との出会いがきっかけであった。当時筆者は教員になっ



コーヒーのレシピに関する古文書

礼文島での発掘ワークショップ

て 1 年目、一生懸命教科書や指導書を読み、専門外の日本史を中心に教壇に立ち、受験をする生徒を相手に東京で作られた教科書をどうやったら効率的に覚えることができるか、という、ある意味筆者自身が受けてきた授業を再生産して行っていた。幕末期の授業では、現在も教科書では横浜港の貿易高を中心に幕末開港期の授業を行うことになっている。一体これで、目の前の紋別の生徒に日本史や世界史の何が分かったことになるのか？と思っていたちょうどその頃、市立図書館が出来て、そこに道立文書館から地域史料がマイクロコピーで入るという情報を得た。これで少しは自分の授業を相対化できるかもしれないと思ったのがそもそもの勉強の始まりであった。

幕末期の北海道は帝国主義期につながる世界市場と直接リンクする場である。筆者が相手にしたのは現在北海道立文書館蔵（重要文化財）となっている箱館奉行所史料の一部であった。この史料は 6 年間（1853-59）という限られた期間ながら、在地の北辺支配がどのような論理で行われ、どのような施策が行われたのかをまとまって考えることのできる史料であった。本報告ではそのいくつかについて実際に史料提示を行い、授業で取り上げた内容を提示した。「髪月代を改めた者への報償下げ渡し」「寄鯨体内より“ボンブランス”銃これ有り」「コーヒー豆下げ渡しレシピ」等々である。さらに筆者は今夏、礼文島で生徒を連れて北大を中心とする国際調査団の発掘ワークショップに参加し、本校で活用する動画教材の作成を行ったが、その様子についても報告した。

次に沖縄史の実践について報告を行った。筆者と沖縄との縁は大学院生の時にさかのぼるが、本格的に沖縄の歴史について勉強を始めたのは紋別へ赴任して、ホタテやコンブの生産者とつきあう中で、交易の重要性に気づいたからである。先述した箱館奉行所史料での俵物買い上げや、コン

ブ・ロードの勉強を始めた。その後職場での沖縄旅行で『高等学校　琉球沖縄史』（東方企画刊）と、新城俊明氏との知遇を得たこと、さらに筆者が別のプロジェクト（国立公文書館アジア歴史資料センター内での中等教育向けデジタルコンテンツ作成）で出会った沖縄県公文書館で、戦争の記憶をどう生徒に伝えていくか、公文書館が持つ様々な一次史料をどのように教材化していくか、を公文書館職員と共同で作ってきたことで得られたことを報告した。

こうした実践は、さらに「北と南」から日本史を相対化すること（くらべる）は、日本史だけのことか？という問題関心につながり、そこから戦前の「南方史研究」の蓄積と「北海道・東北史研究会」の違いに思いをいたすこととなり、ここから、海域アジア史の勉強を始めた。阪大歴史教育研究会に縁ができたことが貴重なきっかけとなり、東南アジア学会札幌大会での報告（「北海道で東南アジア史を教える――「威信財」としての鷲羽（鳥の羽）交易、「幕末期の蝦夷地で薬用に飲用されたコーヒーはジャワ産であったこと」」につながったことを話した。

最後に、今後考えていくこととして、「世界各地における「世界史の語り方」」が分かり（ex. 鳥越泰彦氏・近藤孝弘氏の研究）、「世界の様々な民族和解に歴史学は何をどうやって進めてきたか」が分かり（ex. 柴宜弘氏・近藤氏の研究）、「地域史と一国史の関係」が分かり（ex. 三谷博氏や長谷川貴彦氏・小田中直樹氏の研究）、「いわゆる「受験で出る日本史」「世界史」の内容」が分かり（これまでの筆者の 15 年間の進学校での実践を再検討する）、「これまでの日本における世界史の語られ方」が分かり（ex. 小川孝司氏や松本通孝氏、茨木智志氏の研究）「そうした日本の世界史教育のありかたをアジアの人々と討論する」（AAWH や世界史研究所での取り組みや阪大歴教研への取り組み）ことを積み重ね、これらのことが相互に私の中でつながってくると、「北海道で語るべき世界史」の内容がわかるのではないかという見通しを述べて報告を終えた。なお､残された時間で、余白として、通信制での地域巡検や高齢者の生徒の「オーラル＝ヒストリー」的な実践（旧満州国へ渡り国共内戦を目撃したのち引き揚げてこられた方の「語る会」の実施など）についても写真を提示しながらコメントした。

当日フロアからは様々な発言をいただくことができた。特に筆者の問題関心に即しては、テッサ＝モーリス＝スズキ氏の方法論を踏まえて、こうした周辺部の歴史をどのように考えるかという指摘があった。筆者からは、元々在地の史料から得られた知見をつないで、広げて生徒と一緒に考えていく中で得られた授業実践をどのように理論化するかという点で大変貴重な指摘であること、自らの実践をまとめ直す必要性は考えていることをコメントして当日の討論を終えた。残された課題は大変多いが、今後も世界史の中でこうした「史料を読み、考える」姿勢を大事に、「つなげる・くらべる」ことを考え続けていきたい。

勉強嫌いな子のための世界史
――偏差値 40 程度の高校で世界史を教える意味

澤野 理

1　はじめに

2006 年に（一部の）世間を騒がせた「世界史未履修問題」以降，高等学校における世界史教育についての議論が絶えない。曰く，「大学入試があるから世界史も日本史も暗記科目化する」「通史を教える意味はあるのか」「世界史の学習を通して歴史的思考力を養わなければならない」「高校の世界史は各国史の寄せ集め」「日本史と世界史が別科目として存在することがおかしい」等々，論点は多岐にわたっている。

これらは，いずれも無視できない問題である。しかし，学習の主体である生徒たちが実際のところ「世界史」をどのように意識して学んでいるかという報告や議論は，管見の限り少ないように感じられる。確かに，一口に「高校生」といっても学力や目的意識などに大きな幅があるので，対象とする生徒や彼らを相手にする教師によって，提起される問題点も大きく異なってくる。とはいえ，現場の状況を無視したまま，やれ暗記だ，やれ歴史的思考力だ，などと騒いでも実りある議論とはならないのではないか。

本稿では，筆者の勤務する高校のような学力の低い高校で，生徒はいかに世界史を学んでいるのか，教師はどのような点で苦労しているのかということを，簡潔に報告したい。

2　受験勉強以外で世界史を学ぶ意味

筆者の勤務する高校は全日制の総合学科高校で，インターネット上の高校受験情報によれば偏差値が 41 という低学力校である。地理歴史科・公民科（以下，社会科とまとめて記す）は，世界史Ａ・日本史Ａ・現代社会が各 2 単位必修で，他の科目も選択科目としてすべての科目が設置されている。これら社会科系の科目の選択者は比較的多く，選択の動機もゲームやアニメを入口として興味をもって選択した生徒から，実技系科目の抽選に漏れて（英語や数学を選択したくないから）仕方なく選択した，という生徒まで多岐にわたっている。また，大学受験科目として世界史が必要な生徒は，私の知る限りでは，皆無である。このような生徒たちを相手に，「入試に出るから覚えておきなさい」などという台詞が無意味であることは，容易に想像できる。一方，生徒たちは，前述の一応の興味関心がある生徒も含め，高校受験の苦い記憶から社会科を暗記科目として警戒している。

それゆえ，毎年の授業のはじめに「なぜ，世界史を学ぶのか」ということを生徒に問いかけることを心がけている。世界史を学ぶ意義について，学習指導要領の掲げる目標から個々の教員の抱く熱い思いにいたるまで様々なものがあるだろう。その中の一つに，2006 年の未履修問題に際して世界史研究所のホームページが組んだ特集「世界史教育は不要か」に西川正雄氏が寄せた所感の中

に「それは，日本とは違う世界があるということを知って，自国中心のイメージを変えるだけではなく，多様な世界の存在に気付いて好奇心を抱くことになると思うからである。」という一文がある。これは，高校生に向けてもわかりやすい語りかけであり，筆者もこれを生徒に語りかける基としている。

実際，筆者の勤務校に限らず，保護者のどちらかが外国人であったり，何らかの理由で日本に居住している外国人の子であったりなど，外国につながる生徒の数は増えている。保護者あての文書を総ルビにしている学校もあると聞いている。一方，巷間では，ヘイトスピーチに代表される根拠もない排外的感情が高まっている。これは，（自国である日本も含めた）歴史や文化に対する無知が根底にあると思われる。こうした問題に対処するためにも世界史は必要なのである。

3　受験勉強以外でも通史は必要か？

世界史の学習を語る際，通史を暗記させることに対する批判を耳にする。4 年前，岡山県で開催された全国歴史教育研究協議会の大会で，大学側のパネラーから「本当にレベルの高い進学校では通史を教えていない」という趣旨の発言があった。そうなのかも知れないが，これをすべての高校に普遍化することは無理がある。現代の一般的な高校生は，世界史教育の問題を論じている筆者らの世代が高校生であった頃と比べ，明らかに知識が少ないのだ（ただし，「ゆとり」教育がその原因であるなどと短絡したことを言う気は毛頭ない，念のため）。彼らにとって必要なのは，まず「知ること」，それは，冗談抜きで世界地図の見方からはじまる。何を考えさせるにしても，一定量の知識は必要なのである。もちろん，教師は，これが暗記地獄に陥らないように留意しなければならない。そのためには，各項目に対する興味・関心を高める工夫に加え，教科書にある何を教えて何を省くか，業界用語でいうところの教材の精選，が必要となる。

多くの教師にとって，これが難題となる。その原因として，自身の大学受験の記憶からくる，可能な限り詳しく教えなければならないという強迫観念があげられる。これは，史学科出身でない，または史学科でも日本史専攻であった教師により強く見られる傾向のようである。彼らにとっての規準は，真面目に勉強した教師であればあるほど，自身の受験勉強で使用した高校時代の教科書（それがどこの出版社であれ）と用語集となってしまう。一方，世界史を専門とする教師は，自身の興味のあるテーマについて「これでもか」というくらい細かく教え込もうとする傾向が見られる。筆者のかつての同僚にも，フランス革命のみで半年授業を行ったという強者がいた。しかし，有名な山川出版社の『詳説世界史』も筆者らの時代のものとは内容が変わっている。高校教師も歴史学研究の新しい成果にアクセスし，現場の教育内容に反映させることを考えなければならない。

4　生徒の感想は？

筆者は，定期試験実施時に授業プリントの提出を課し，その際，学習内容や授業形態についての感想を書かせている。以下にその例を挙げる（用

字・表記は原文のママ)。

今回の学習で一番気になったのはイスラームの誕生についてです。(中略) 六信五行のなかには 1 日 5 回もお祈りをしたり，断食は日中に飲食をおこなわなかったりさらに豚肉を食べたりしないのもすごいなと思いました。自分が一番にすごいなと驚いたのは女性は肌や髪などを見せないということです。それよりすごい人は顔を見せない人もいてびっくりしました。今回の学習はとても面白い発見ができて良かったです。(3 年男子)

私が今回興味を持った内容は，ヨーロッパ世界の内容でその中でも特に，カトリック教会と文化の部分に興味を持ちました。自分の見ていたアニメの物語で，ローマ教皇，グレゴリウスなどのキャラや言葉が出てきました。自分の見ていたアニメのキャラや言葉が多く出てきたので，聞いていて楽しい授業でした。(3 年男子)

日本は，昔，オランダを通してまで中国のものを輸入したかったのかがものすごく興味がある。となりの国だから，すぐ手に入る気がするのに，なんでなのか，不思議！今回は，王朝の名前が多すぎて，覚えるのが大変。そして頭が困らん。昔は，対こうしようとして，たくさんの王朝が争いうばいあっていたのかと思うと，今の世の中平和になったのだと思う。結果，命をムダにしてまで得たものでいいのか私にはわからない !! ぎせいをださないで解決しようとは思わなかったのかなと思う。(中略) 今回は，足利義満やチンギスハンなどと有名な人たちが，活やくした，背景を知ることができた。世界史もあと少ししか学べないけど，今後，興味のもったことを大学でも学べたらいいなと思う。(3 年女子)

これらから，生徒たちが「とりあえず新しいことを知ることができてうれしい」という感想を持ったことが読みとれる。一方，随分と「ものを知らない」生徒たちだと感じた方もいると思う。これは，前節でも記したように，筆者の勤務校に限ったことではなく，デフォルトの高校生の標準的な知識レベルであると考えてよいだろう。いわゆる進学校の生徒は，ここで得た情報の記憶力に優れているという点で「高学力」と言われるのである。

5　今後の展望

以上，思いついたことを縷々書き連ねてきたが，現場で生徒に接している限りでは，（私語・居眠りなど腹立たしいこともたまにあるものの）教師側のやり方次第で興味・関心をもって世界史を学ぶようになるのではないかと思う。もしかしたら，それは授業の一時だけのことかも知れない。しかし，頭から世界史を拒否されるより，はるかに望ましいのではないだろうか。ICT 技術の進歩により，授業で用いることができるツール（情報・視聴覚機器）は，20 年前に比べれば格段に充実している。また，国際理解教育などの分野を中心にワークショップ的な授業技法も数多く公開されている。こうした，How to 的な授業改善に加え，教師間の，場合によっては大学の研究者を巻き込んだ，連携研究の試みも少しずつではあるが，神奈川や大阪を中心に着実に進んでいる。

今後，少しでも多くの教師が，それぞれの現場に立脚した問題意識をもって仲間に加わってくれることを祈念してやまない。

RIWH アフリカ奨学基金（第二期）給付のお知らせ

皆さまの篤志に支えられ、2013 年秋の新学年度からアフリカ奨学金の第二期を開始することができました。ご寄付をお寄せいただいた皆さまには、深くお礼申し上げます。

前回同様、イロリン大学人文学部歴史および国際研究学科 (Department of History and International Studies, Faculty of Arts, University of Ilorin, Nigeria) において、受給学生の募集と同学科の先生方による選考が行われました。論文審査の結果、「RIWH アフリカからの世界史賞 RIWH Award for World History from Africa」の受賞者として以下の 3 名（男性 2 名、女性 1 名）の方が決定いたしました。

- Adeleke Francis Kolade さん
  （34 歳、イロリン大学人文学部歴史および国際研究学科）
- Chukwuma Henry Kodili さん
  （21 歳、同）
- Ajiboye Tolulope Oluseun さん
  （22 歳、同）

受賞者の方には、賞状と奨学金 1,500 ドル (USD) をお送りしました。受賞者の論文ならびに授賞式の様子は、現地から写真データ等が届き次第、世界史研究所のホームページでご紹介する予定です。

本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2014 年 02 月 24 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/

スタッフ

所　長	南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
顧　問	下村 由一（千葉大学名誉教授）
	百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
研究員	木村 英明（早稲田大学講師）
	木村 真（日本女子大学講師）
	姉川 雄大（千葉大学特任助教）
	崎山 直樹（千葉大学特別研究員）
	鹿住 大助（島根大学講師）
特別研究員	稲野 強（群馬県立女子大学名誉教授）
	近藤 正憲（学術博士）